

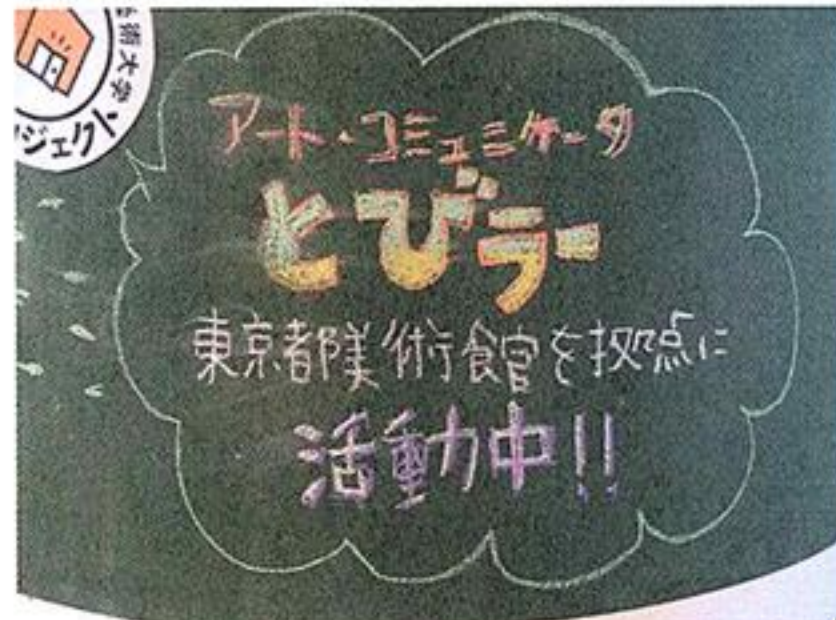
市民のエネルギーを取り込んで、 アートによる新たなコミュニケーション活動を展開

東京都 | 東京都美術館 × 東京藝術大学「とびらプロジェクト」

文・山下里加 やました・りか
アートジャーナリスト
写真・雨田芳明 あまだ・よしあき



2014年2月16日、アートを介して“創造と共生の場”を築くための活動を広く知ってもらうため、「『とびらプロジェクト』フォーラム」が開催された。藝大側の日比野克彦教授（前列中央）をはじめ、プロジェクトに関わるメンバーやとびラーが大集合



上：都美で開催された「第62回東京藝術大学卒業・修了作品展」では、とびラーがファシリテートしながら会場を巡る対話による鑑賞会「見楽会」も行われた/左下：親近感がわく手描きの表示/右下：とびラーが美術館内で活動する時は来場者にわかるようプレートを下げて対応 以上写真：©IFA

2012年4月、上野恩賜公園内にあ
る東京都美術館(以下、都美)が大規模な
改修を終えて、リニューアル・オープ
ンした。同時に、事業の見直しも行われ、
アートへの入口を掲げた新しいミッ
ション(P13コラム参照)を設定。隣接す
る東京藝術大学(以下、藝大)と連携を組
み、美術館の機能を拡張する挑戦的な試
みを始めた。

そのひとつが「とびらプロジェクト」で
ある。これは、一般から公募で集まった
アート・コミュニケーター(愛称「とびラー」
が、人と作品、人と人、人と場所を繋い
でいく活動を軸としている。例えば、展
覧会に合わせたオリジナルの紙芝居を上
演する「紙芝居プロジェクト」、来館者と
対話を通じた作品鑑賞を行う「見楽会」、
都美の建物の魅力を紹介する「トビカン

みどころマップ」の制作など、いくつもの
企画がとびラーの手で実現されている。
とびラーを支え、プロジェクト全体の運営
を行うために、都美の学芸員と藝大の教
員らを中心としたプロジェクトチームが
結成されており、とびラーならではの発
想を活かし、実行するまでを細やかにサ
ポートしている。

美術館と大学が出会うことで実現した
「とびらプロジェクト」。その背景を都美
と藝大の双方から探り、異なる組織と経
験をもつ人が協働する仕組みづくり、市
民を巻き込んだプロジェクトの現状をレ
ポートする。

このプロジェクトの特徴は、アートを介
して創造と共生の場Ⅱアート・コミュニ
ティを築くことを目的として設定し、美
術館をそのための拠点と位置づけてい
ることである。コレクション形成と展覧
会活動を中心とした、従来の美術館像と
は異なる美術館のあり方を探っているの
だ。

都美(開館時は東京府美術館)は、1926
(大正15)年に日本初の公立美術館として
開館した。当初はコレクションをもたず、
主に日展(当時の文展)や二科会など、美
術団体の公募展会場として使われていた。
また、西洋の近・現代美術作品を紹介する
展覧会も開催されていた。

建物の老朽化に伴い、75年に日本にお
けるモダニズム建築の巨匠である前川國

男の設計による新しい建築で、再オープ
ンした。中庭を囲むように建物が配置さ
れ、それぞれ常設・企画機能(Ⅱ企画展の
開催)、新作発表機能(Ⅱ公募展の開催)、
文化活動機能(Ⅱ教育普及事業の展開)の
3つに対応していた。この時、専門職と
しての学芸員が配置され、作品収集も本
格的に行われるようになった。具体的な
活動としては、日本の美術館ではまだ少
なかつた現代美術の自主企画展、教育普
及活動としての公開講座や造形講座が開
催され、76年には、日本初の公開制美術
図書室も開設された。一方で、引き続き
公募展の展示、新聞社やテレビ局などマ
スコミとの共催展も開催しており、年間
約270万人以上が訪れる美術館となっ
ていった。

その後、95年に東京都現代美術館の開
館に伴い、収蔵品のほとんどが移管され、
さらに07年に国立新美術館が開館すると、
日展や二科会などの大規模な公募団体は
展示会場を国立新美術館へと移していく。
都美の学芸員であり、交流係長である
佐々木秀彦さんは、当時の状況について

「学芸員の数も絞られ、新聞社等との共催
がメインとなった。幅広い分野を扱い、
美術館としての特色が見えにくくなった」
と振り返る。

また、施設が老朽化したため、約
100億円をかけて大規模な改修工事を
行うことが決まり、東京芸術文化評議会
の文化制度検討部会が改修後の「東京都美

■ 東京都美術館

● ミッション

東京都美術館は、「アートへの入口」となることを目指します。展示会を鑑賞する、子どもたちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害をもつ人が何のためらいもなく来館できる—すべての人に開かれた「アートへの入口」として生まれ変わります。新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場=アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」に出会う場とします。これらを実現することで、東京都美術館が人びとの「心のゆたかさの拠り所」となることを目指して活動していきます。



交流係長・学芸員
佐々木秀彦



リニューアルされた東京都美術館。1975年築の建物の躯体を残しつつ、全面改修が施された 写真提供：東京都美術館

● アート・コミュニケーション事業

アートを媒介として、人々の繋がりを育む事業。美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場となるよう、各種プログラムを実施。先生と子どものための「スクールプログラム」、展示会と連動した鑑賞や造形の「ワークショップ」、13年からは上野恩賜公園に集まる9つの文化施設(上野の森美術館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京国立博物館、恩賜上野動物園、国立国会図書館子ども図書館、国立科学博物館、東京藝術大学、東京文化会館)が連携し、子どもたちのミュージアム・デビューを応援する「Museum Start あいうえの」が実施されている。「とびらプロジェクト」はアート・コミュニケーション事業の基盤事業のひとつと位置づけられ、とびらは、それぞれのプログラムの伴走・牽引役を担っている。

美術館が取り組むべき新規事業の内容とその規模」についての答申を行う。そこで、新・東京都美術館の基本的使命(ミッション)として掲げられたのが「人間にとっての表現の意味を考察し、実践する活動拠点」だった。

この答申を受け、佐々木さんをはじめ

都美の学芸員は、美術館という場で実践できる活動にするために熱い議論を重ねた。佐々木さんには、都美と同じ公益財団法人東京都歴史文化財団が運営する「江戸東京たてももの園」の事業見直しに携わった経験があり、それを踏まえてリニューアル後の使命と計画づくり、新しい組織

体制を整えること、ミッションをみんなと共有できる具体的な文言にすることに全力を尽くした。そして導き出したのが冒頭の「アートへの入口」というキーワードだった。

「都美には、本来の美術館の「骨格」となるようなコレクションがない(き)。一方、世界中からあらゆるジャンルの良質な作品をもってこれる可能性がある。その隣では、公募展や児童・生徒の作品展が開かれて、家族連れで賑わっていたりする。とすれば、この美術館は世界中の良質の作品が集う美術館であり、それらを初めて美術館を訪れる人たちにも楽しめるようにすることが我々の役割ではないか。何を見せるのかではなく、作品と人々をどう繋ぐのかを拠り所にしようと考えたのです」と佐々木さん。

具体的な事業として、

- ① 見る喜び、知る楽しさを提供する展示会事業
- ② 交流による新たな可能性を探求するアート・コミュニケーション事業
- ③ つくる喜びを共有する公募展事業
- ④ 訪れる楽しさを充実させるアメニティ事業

という4つの柱が立てられた。

①の展示会事業については、実施できる人材が館内にいる。③の公募展の改革は困難であったが目処がついた。④のレストランやミュージアムショップの拡充も計画が立った。しかし、②のアート・コ



右：12年6月～9月の「マウリッツハイス美術館展」でのとびラボ企画「あなたも真珠の耳飾りの少女」は、行列ができるほどの大好評/左：「建築ツアー」の様子(12年11月)。2年前の改修工事前の都美と改修後の姿を模型を使いながら説明 以上2点写真提供：東京都美術館

*2014年現在の所蔵品は書36点と野外彫刻などの立体作品12点。



“現在進行形!対話から生まれる未来”をテーマに行われた今年の「『とびらプロジェクト』フォーラム」(14年2月)。第1部は藝大大講義室で、プロジェクト・スーパーバイザーらによるクロストークとパネルディスカッションが行われた

美術学部先端芸術表現科教授でもある日比野克彦さんを紹介されたのだ。

一方、藝大は、都美との連携をどのように受け止めたのだろうか。大学と美術館という違いもさることながら、藝大は国立の施設であり、都美は都立の施設である。ひと昔前であれば、縦割り行政の壁にはばまれ、こうした設置者が異なる組織同士の連携はかなり難しかったかもしれない。だが、国立大学である藝大は、04年に国立大学法人化されている。さらに、07年には、

外部からの依頼や相談の窓口、大学内の調整と事務作業を担う「社会連携センター」が開設されていた。藝大は、学生への専門教育を行うだけでなく、大学内で培われた経験や専門性を広く社会に還元していくことを当然とする気風が芽生えていたのだ。

また、教育機関としても、優れた作品を制作するアーティストだけでなく、アートを介して社会に積極的に関与して

コミュニケーション事業は、館内に経験者が少なく、実際に立ち上げていくべき計画のイメージが充分には議論できていない。隣にある藝大とは連携したいという話は出ており、森司さん(東京都歴史文化財団東京文化発信プロジェクト室地域文化交流推進担当課長)から、美術家で藝大

いく人材づくりを教育目的のひとつとするようになっていた。今年の2月16日に開催されたプロジェクトを紹介する「とびらプロジェクト」フォーラムでも、社会の中にある既成の価値観に対する別のものさしを差し出せるのがアート。そのものさしを使い、社会のかたちをクリエイティブに引き直せる人材を輩出していきたい。そのために、大学の敷地内だけではなく、より積極的に社会に出て行きたい、と説明されていた。

すでに藝大には、美術学部先端芸術表現科のキャンパスのある茨城県取手市で、市と市民、藝大の三者が共同で「取手アートプロジェクト」を実施してきた実績もあるし、ほかにも多数の地域連携プロジェクトに取り組んできた。

藝大側の代表である日比野さんは、「これまで芸術は彫刻や絵画といったものを指していただけで、近年ではことを起こすアートプロジェクトが新しい領域として動いている。僕自身もものづくりからことづくりの場面に多く関わるようになってきた。それは、つくり手である自分自身の居場所づくりでもあった。では、藝大のある上野公園界隈を見渡すと、美術館や博物館、動物園など、すでにさまざまなものをもつ施設があり人がいるが、それぞれの繋がりにはあまり強くなく、自分の居場所にはまだなっていない。それらを新しいやり方で繋いでいけば、新しい何かが生ま

れてくるのではないか、と思った」と語る。日比野さんが属する美術学部が連携先となる一方、このプロジェクトの実質的な設計を行い、現場を動かせる人材が必要だった。そこで白羽の矢が立ったのが、伊藤達矢さんだ。藝大で油画を学んでいた伊藤さんは、学生時代に取手アートプロジェクトの運営に参加。卒業後も企画・運営を中心に担い、先端芸術表現科の助教となつて、「福島芸術計画×Art Support Tohoku-Tokyo」(2011-)などアートを紹介したコミュニティづくりを実践していた。

新しい都美のミッションに強く共感した伊藤さんは、都美からの要望を快諾し、とびらプロジェクトのプロジェクト・マ



フォーラム前半に行われたパネルディスカッションの様相(左から森司、西村佳哲、日比野克彦、稲庭彩和子、伊藤達矢の各氏)

ネージャを専業とする美術学部特任助教に就任した。加えて、近藤美智子さんが美術学部特任助手となり、プロジェクト・コーディネーターとして勤務することになった。

2人は藝大の所属であるが、日々の業務を都美館内のプロジェクトルームで行っている。こうして東京藝術大学社会連携センターと美術学部が連携の窓口となり、アート・コミュニケーション事業に専門性の高い教員・職員を送り、共同運営する形が出来上がった。

一方、都美も、アート・コミュニケーション事業を牽引するための専門家として、神奈川県立近代美術館普及課学芸員だった稲庭彩和子さんを採用。日本で最初の公立近代美術館として51年に開館した同美術館は、教育普及事業や地域連携への取り組みでも知られている。稲庭さんは、07年から3年間、地域の行政や教育委員会と連携した地域の人々との話し合いの場である「ひとづくり、学びの場としての美術館活用推進委員会」の運営を担当し、学校の授業などで活用する美術館キット「Museum Box 宝箱」をまとめた実績をもつ。

稲庭さんは、美術館と大学が連携するついでにプロジェクトについて、次のように語る。

「公立の美術館が市民と対話をしていくためには、それなりの仕組みづくりが必

要です。『美術館で何かやりたい』という市民がいても、それが個人としての一市民だと、行政の組織の中ではなかなか話が進まない。例えば、市民にNPOをつくっていただき、NPOとして美術館と連携するという試みをしたこともありま

す。とびらプロジェクトでは、藝大と連携することで、市民と対話が出来る枠組みが生まれた。また、プロジェクトチーム内でも、異なる組織文化をもつ人が集うことで一組織内の前例や価値基準にとらわれにくくなり、新しい発見や発想の幅が広がっています」

では、実際にとびらプロジェクトはどのような計画・運営されてきたのだろうか。

とびらプロジェクトは、都美館内の一室がプロジェクトルームとして使用され、藝大の伊藤さん、近藤さんが専任の担当者として勤務し、稲庭さんをはじめ数名の学芸員とともに日々の運営をしている。加えて、森さん、西村佳哲さん(働き方研究家/リビングワールド代表)がプロジェクト・スパーパーバイザーとして参加している。

都美から日比野さんに連携を打診した当初は、日比野さんが監修する連続したワークショップなどが想定されていたが、その後の検討の結果生まれたのが「1000人でつくる私たちの美術館」という構想だった。

都美の新しいミッションでは、アート・コミュニケーション事業を「交流による

新たな可能性」を追求する」としたものの、そのままでは具体的な活動イメージが浮かばない。まずは、顔と名前が把握できる1000人で、美術館という場所で何ができるかを話し合おう。そして学芸員のサポートをするボランティアではなく、主体として活動するプレイヤーとしてさまざまな展覧会や事業を繋ぐアート・コミュニケーションを誕生させようと考えたのだ。

ネーミングにはずいぶん悩んだが、最後は日比野さんの提案で、都美の「とびら」扉を開けるの意味をかけて「とびら」に決定。プロジェクトの名称は「とびら」に決まった。

そして、都美のリニューアル・オープン3カ月前にアート・コミュニケーションタ(とびら)の募集が始まった。キャッチコピーは「アートで可能性を広げていこう!」。聞き慣れない呼び名、未知の活動内容に果たして応募はあるのか、というスタッフたちの心配をよそに、約350人もの応募があり、熱意あふれる書類(応募動機をA4用紙1枚以内に書く。美術の知識や美術館での

経験などは問われない)が美術館に届いた。書類選考と面接を経て、18歳から70歳の68人に、都美がリニューアル以前から開催していた「障害のある方々ための特別鑑賞会」をサポートしていたボランティア26人が合流した。

「以前からのボランティアの方々からプロジェクトの考え方やアート・コミュニケーションタという名称と活動内容を受け入れてくださるか、心配していました。ですが、説明会が終わると『私たちが何をやるのかはまだハッキリわからないが、都美が変わろうとしていることはわかった。協力できることならしたい』と言っていただいた。新しく応募してくださった方も含めて、美術館と関わりたい方がこ

東京藝術大学

●メッセージ(東京藝術大学の使命と目標)

アートを介したコミュニティづくりは、作品を創造する人、そしてそれを享受する人を含め、人々のクリエイティブな力が生きる社会をつくることに繋がります。東京藝術大学は、芸術の基本である「もの」としての作品に加えて、「こと」としての芸術に取り組み、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献します。



写真提供:東京藝術大学

んなにいらっしゃるんだと嬉しい驚きがありました」と稲庭さんは言う。

こうして総勢94人のとびラーとともにとびらプロジェクトは始動した。自ら考へ、実行するアート・コミュニケータには、身の周りの小さな違和感にきく・気づく「観察力」、それを他者と共有するために「話す」「表現力」、違和感を解消する企画という「形」にしていく「実行力」が必要だと考えたプロジェクトスタッフは、それらを学べるプログラムを組んだ。

まず、4月から全6回の一連の基礎講座が開講され、学芸員やプロジェクトのスーパーバイザーらが講師となり、とびラーたちは、フィールドワークやワークショップ形式で発想力や他者と協働する力を身につけていく。

例えば、西村さんのワークショップでは、「きく力」が話し手をコントロールしていることを体得した。新しいプロジェクトの種となる「気づき」は繊細で、ともしれば言葉にもならず消えていきがちだ。それを他者と共有し、成長させていくためにはきく力が大事だ、と西村さんはとびラーたちに伝えていった。日比野さんは、上野公園内にある多種多様な文化施設を実際に訪れ、それらを繋ぐアイデア出しをするワークショップを行った。すべて無料であり、基礎講座を通して、とびラーたちは都美のミッションと藝大のメッセージを共有し、自分たちの役割

とびラー



淵上幸吉さん
千葉県柏市から参加。建築ツアーに関わるプロジェクトをメインに活動し、自力で調べた前川國男に関する資料は分厚いファイルになっている。「長く企業人として働いてきましたが、とびラーの活動はまったく異次元の世界ですね。企業では徹底的に無駄を削ぎ落

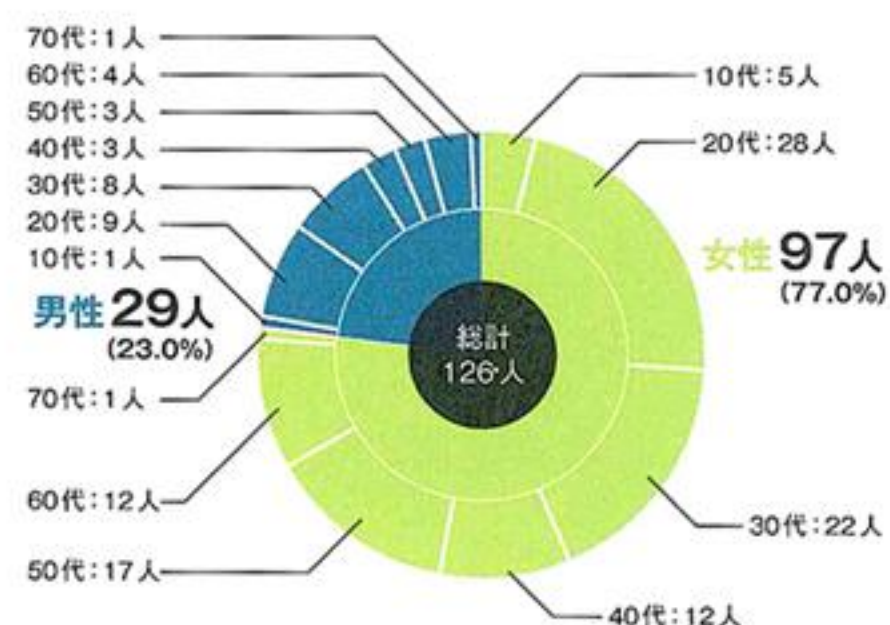
として、目的に向かって最短距離で到達するのがよいとされていますが、とびラーでは無駄がたくさんある。対話する時間もたくさんあるし、プロジェクトに直接的には関わらない「見守り」という役割も大事にされている。それがいいんです。会社では仕事に集中していますが、土曜日の朝目覚めると「今日は美術館だ!」とパッと頭が切り替わるんですよ」



小野田由実子さん
埼玉県さいたま市から参加。障害のある人も美術館にアクセスしやすい環境を考える「と・も・に」をメインに活動している。「元々、手話を学んでいた経験から「障害ある人も何のためらいもなく来館できる美術館」というミッションにひかれて応募

しました。基礎講座から驚きばかりで、特に西村さんの「きく力」が印象深いです。他のとびラーの皆さんからも刺激を受けて、まさに自分の扉がどんどん開かれていく感じです。とびラーへの参加を機に、美術館やファシリテーションについてもっと学びたくなり、学校に通い始めました」

2013年度のとびラー内訳



を自覚していく。

6月中旬からは、実践講座が始まり、「鑑賞実践講座(モノと人を考える)」、「アクセス実践講座(ヒトと人を考える)」、「建築実践講座(ハコと人を考える)」という3つから1つ以上を選択し、受講する。講座内容と直結した活動に参加していくととびラーも多い。学びと実践のサイクルがあることで、美術館を拠点とした活動が充実したものになっているのだ。

さらに自らのアイデアを実現したい人は、ミーティング「とびラボ」を開く。これは、とびラー同士が自発的に開催するミーティングで、「この指とまれ式」↓「ここにいる人がすべて式」↓「解散!また結成」という3つの原則で運営されている。ひとりのとびラーに新しい活動のアイデ

アがひらめいたら、「この指(IIアイデア)とまれ!」と他のとびラーを2人以上集めてチームをつくる。そこで集まった人全員ができることを考え、最初のアイデア

の上に他の人のアイデアを重ね合わせ、オリジナルの活動へと練り上げていく。活動が達成され、ふりかえりを終えたら、その「とびラボ」は解散する。

最終的には、スタッフと相談しながら実行の形に落とし込んでいく。活動日数は原則として月2回以上。自身の生活スタイルや意欲によって、とびラーは関わり方を選択していきける。さらに実質的な活動には積極的に参加できなくても、活動の成り行きを見守るという参加も歓迎されている。つまり、プロジェクトへの関わり方の自由度を高めた仕組みづくりが

されているのだ。

「ボランティアな活動では係ごとにチームをつくってリーダーを決めて、目的に向かって一直線にゴー!といったやり方をする、たいてい失敗することが、これまでの地域プロジェクトの経験からわかっていった。とびらプロジェクトでは、役割を固定させず、その時々にな人が集まり、終わったら解散するといった有機的なチーム構造をつくることで、次々とアイデアが生まれ、それらが連動し、また新しい活動が生まれるという上昇のスパイラルが生まれています」(伊藤)

情報共有に関しても、細やかな配慮がされている。とびラボと合わせて、プロジェクトを潤滑に動かす重要なツールとなっているのが、ネット上の掲示板であ



フォーラムの第2部は、都美のアートスタディールームに移動しての「オープンスペース・カフェ」。実演やスライドなどを交え、とびラーたちが熱い心で、これまでの活動を紹介した 最下段写真提供:東京都美術館

それぞれ地域や都市全体にどう広がっていくかが、とびらプロジェクトの成否となる。当初からとびラーの任期は最長3年と設定されており、今年4月からは「3年目ゼミ」が始まる。3年目を迎えるととびラーたちは、このゼミでとびらプロジェクトを離れた後にどのような活動をしていくかについて考え、実践していく予定だ。

東京都美術館と東京藝

る。とびラーには20歳〜50歳代の働き盛りが多く、全員が顔を合わせてのミーティングはなかなか難しい。それを補完するため、アイデアや意見をネット上の掲示板に書き込み、他のとびラーがそこに意見を書き加えていく。また、とびラボの議事録(ホワイトボードのメモを撮影したもの)も、スピーディに掲示板に掲載されていく。これらは実際に会って話す時間をより充実したものにするための工夫だという。

「ひとつのアイデアを実現させるためには、たくさんの方の対話が必要なのです。私たちスタッフも常に顔の見える場にいるようにしていますし、とびラボやネット掲示板でそれぞれの状況を把握しています。失敗に終わる」というのは対話が足

りないから。お互いに意見を言い合えれば、失敗を次の経験へと活かしていける。こうした手間を惜しまないことが大事だと思っています」(稲庭)

前述した「とびらプロジェクト」フォーラムの第2部では、とびラーたちが、活動拠点である都美館内のアートスタディールームでオープンスペース・カフェを開いた。大勢の参加者を前に、とびラーたちは「紙芝居プロジェクト」「建築ツアー&マップ」「とびらボードでGO!」「海をめぐるものがたり」「対話による鑑賞」「と・も・に」「缶バッチプロジェクト」「ライぶらり」「スペシャル・マンデー」「ヨリミチプロジェクト」など、多種多様な活動を活き活きと紹介し、みんな熱心に聞き

入っていた。とびラーたちにとって、美術館は生活の一部になっているようだった。

「とびらプロジェクトは、家でもない。職場や学校でもない。3つめの場所を目指しています。近年では同じようなタイプや階層の人たちだけの小さなコミュニティに細分化され、個々のコミュニティの隙間からこぼれ落ちる人が出てきている。だからこそ、個別の価値観や立場を越えて集まれる社会的なプラットフォームが必要なのではないか。美術館はそういう役割も担っていかれると思っています」と伊藤さん。

ただし、美術館に人々のエネルギーを集めることが最終目的ではない。とびラーたちが美術館で培った経験やノウハウを、



術大学が出会うことで、美術館は市民のエネルギーを繋ぎ、高め、美術館の外に向かつて発信していく新たな社会装置として機能し始めた。とびらプロジェクトは、とびラーや来館者にとってのアートへの入口だけでなく、美術館という存在そのものの新たな扉を指し示している。